

# 『手話・日本語辞典』の試み

筑波大学附属豊学校 竹村 茂  
翻 訳 業 平美穂子

## 1. はじめに

現在の日本の手話辞典はすべて日本語から手話を採る辞典である。国語辞典が意味の分からない日本語をひいて日本語の意味を知るためのものであると同じように、意味の分からない手話をひいて手話の意味を知るための辞典は、現在のところ日本にはない。(外国の手話辞典の一部には記号を使って手話から音声語をさがす辞典がある。例：ストーカー)

わたしたちの研究が試みているのは、国語辞典がいろは順かあいうえお順に日本語を配列しているように、手話のある一定の規則に基づいて配列し、手話からその手話に相当する日本語の意味を探すための辞典である。以下、このような手話から日本語を探す辞典を『手話・日本語辞典』と称することとする。

『手話・日本語辞典』を考えるに当っては、ストーカーのような特殊な記号を使うのでは検索するために相当の訓練を要することになるので一般的ではない。あまり体系的なことを考えず、実用を目指せば指文字程度の手がかりで、1000語程度の手話を検索できるのではないかと考える。試みに以下の方法で『手話・日本語辞典』の作成を考えてみる。

## 2. 基本的な考え

手話を形によって分類し、その分類ごとに手話を配列して、形から手話を検索できるようにする。形の分類は、4つの段階に分けて行う。

第1段階の分類では、その手話のもっとも特徴的な形を抽出する。第2段階では、概ねその手話が「両手で行われるか、片手で行われるか」で分類し、第3段階では、両手ならばその手は「対称形か非対称形か」で、片手ならばその手は「顔の前に置かれるか、胸の前に置かれるか」で分類する。

このように分類をしていって、一つの分類項目に入る手話が10個以下の場合には、そこで分類をやめる。というのは、10程度の手話ならば、一覧して容易に探すことができるからである。この作業は、検索が目的であって分類が目的ではない。

## 3. 手形の分類のしかた

手話の形は、現実には手話を見たとき、もっとも目につく形を基本として分類する。

(1) 手話の最初の形に着目して手話を分類する。

①まず最初に動く手に着目する。

②左右が同じ動作または動きがない場合は右手に着目する。

③左右の手が上下に重なる場合は上の手に着目する。

④以上の分類でも一つの手形にしぼれない場合は、右手の手形と左手の手形のそれぞれに分類する。(同一の手話が二つの手形に分類されることは許容れる。というのは、先に述べたように、検索が目的であって分類が目的ではないからである。)

検索の便をはかるため代表手形はまず指文字からとることとする。

(2) 手形は次の形のいずれかに分類する。

<指文字>

指文字のうち次のものを分類の基準として用いた。

イ	ウ	エ	オ	/	カ	キ	ク	ケ	コ	
サ	シ		セ	ソ	/	タ	チ	ツ	テ	ト
			ヌ	ネ	/	ハ	ヒ		ヘ	ホ
			ム	メ	/	ヤ			ユ	
ラ	リ		レ	ロ	/	ワ	ン			

ただし、アはタに、スとルはシに、ナとニはトに、フはムに、マとミはユに、ヨはホに含むものとする。

手の形が同じもの同士は、使用頻度のいちばん多いものを代表形とした。手のひらの向きが違う場合は別々に分類した。

「テ」については、手のひらが相手を向いているものを「テ」とし、手のひらが上を向いているものは「テ↑」、手のひらが下を向いているものは「テ↓」と分類した。これも、手のひらの向きは視覚的な弁別にとって重要なファクターであるからである。

従って、各指文字は次のように拡大定義される。

「ソ」は指先の向きにかかわらず指さしをしている

手形すべてを含む

「ヒ」は上を向いているもののみ。

「サ」は握り拳の手形すべてを含む。

<代表手形>指文字だけでは手話の最初の形のすべてを分類できないので、次の代表手形を設定した。

- 「手刀」の形
- 「C」の形（英語指文字「C」）
- 「テ↓」の形（指は閉じて指先は前を指し手のひらは上を向いている形）
- 「テ↑」の形（指は閉じて指先は前を指し手のひらは下を向いている形）
- 「V」字形（英語指文字「V」）
- 「Q」字形（英語指文字「Q」）
- 「ひっかく」形

(3) 重複の許容

分類自体が目的ではなく、手の形の解釈がずれても目的の手話にたどりつくことが必要であるので、同じ手話が複数のところに分類されても許容することにした。

(4) 作業対象

作業は以下の本について行なった。

『手話入門』見出し語数 693語 伊藤政雄・竹村茂  
廣済堂出版

4. 分類の結果 以上のような方法で『手話入門』693語の分類作業を行った結果は以下の通りである。

階層1	階層2	階層3	階層4
C 24	片手 10	頭 5 胸 5	
	両手 14	対称 4	その位置で 2 縦に動く 2 水平面で動く 2
		非対称10	
Q 14	片手 7		
	両手 7	対称 6 非対称 1	
V 2			
イ 23	片手 10	頭 4 胸 6	
	両手 13	対称 1	
		非対称12	最初ががついている 5 最初が離れている 7
ウ 10	片手 6	頭 4 胸 2	
	両手 4	対称 3 非対称 1	
オ 4			
カ 1			
キ 1			
ク 39	片手 18	顔 12	あご 8 ほほ 1 額 3
		胸 6	
	両手 21	対称 16 非対称 5	その位置で 6 縦に動く 4 水平面で動く 6
	片手 7		

階層1	階層2	階層3	階層4
テ↑ 28	片手 8		
	両手 21	対称 17	その位置で 3 縦に動く 8 水平面で動く 6
		非対称 4	
テ↓ 40	片手 12	その位置で 5 縦に動く 5 水平面で動く 5	
	両手 30	対称 17	その位置で 5 縦に動く 7 水平面で動く 5
		非対称13	その位置で 4 縦に動く 3 水平面で動く 6
ト 24	片手 11	顔 7 胸 4	
	両手 13	対称 非対称13	その位置で 4 縦に動く 8 水平面で動く 1
ヌ 3			
ネ 3			
ハ 3			
ヒ 31	片手 13	顔 7 胸 6	
	両手 18	対称 9 非対称 9	
ひっかく 13	片手 9	顔 6 胸 3	
	両手 4		
	片手 22	顔 15	あご 1 首 2 ほほ 2 頭 4 口 5 耳 1

コ 10	両手 3		
サ 56	片手 19	顔 14	あご 1 横 10 鼻 3
		胸 5	
	両手 37	対称 21	1回 10 繰り返し 11
		非対称 16	違う形 7 水平面で動く 1 同じ形 8
シ 1			
セ 2			
ソ 82	片手 56	1回 8 胸 10 耳 3 ほほ 6 目 2	繰り返し 7 鼻 2 顔 7 口 11
		両手 26	他の手がソの形 9 他の手が開いた形 8 他の手が閉じた形 9
タ 35	片手 13	顔 6 胸 7	
		両手 23	対称 6 非対称 17 結婚型 11 非結婚型 5
つまむ 13	片手 6		
	両手 7	対称 6 非対称 1	
テ 30	片手 9	顔 6 胸 3	
		両手 21	その位置で 5 縦に動く 6 水平面で動く 4
			非対称 5

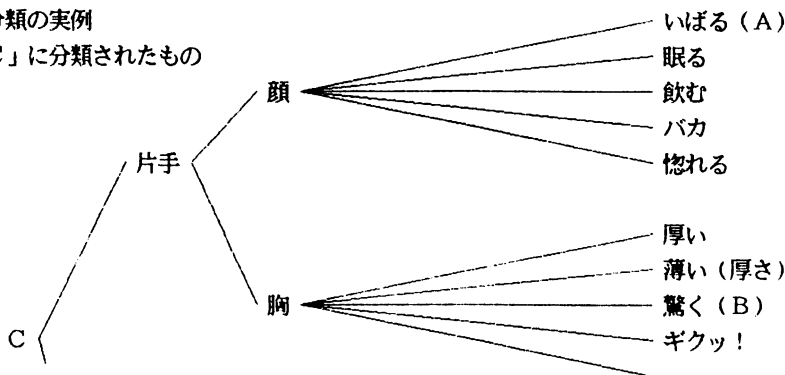
ホ 50	両手 28	胸 7	
		対称 22	その位置で 12 縦に動く 3 水平面で動く 7
		非対称 5	
ム 12	片手 7 両手 5		
メ 23	片手 8 両手 15	顔 2 胸 5	
		対称 6 非対称 8	
モ 42	片手 14 両手 28	顔 5 胸 9	
		対称 19	その位置で 4 縦に動く 4 水平面で動く 11
		非対称 9	
ヤ 6			
ユ 6			
ラ 1			
レ 12	片手 2 両手 10	対称 7 非対称 3	
ロ 2			
手刀 31	片手 6 両手 27	対称 18	その位置で 6 縦に動く 4 水平面で動く 8
		非対称 9	

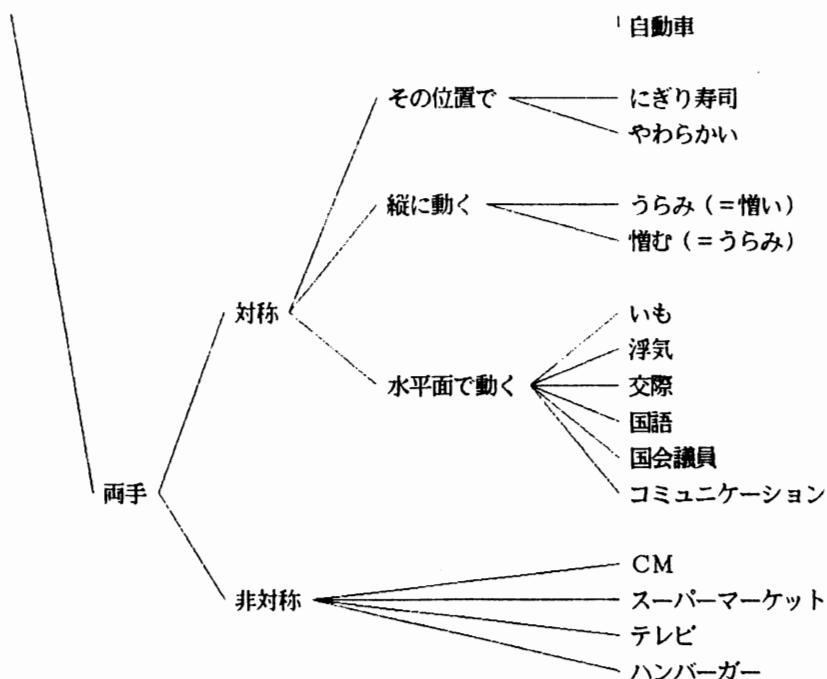
この他、『手話入門』にあるが、現在あまり使われていないと判断し、分類の対象から除外したものが16個ある。

分類に使われた代表手形は合計35個である。

### 5. 分類の実例

「C」に分類されたもの





#### 4. 考察とまとめ

指文字に用いられる形を基準に手話の分類を行なおうということだったが、指文字だけでは分類しきれず、指文字にない手形を加えたり、また「手の向きは無視する」ということが原則だけれど、例外的に、ある手形に向きという要素を加えて別の手形とみなしたり、などといった操作が必要になってきた。その結果、合計35個の手形によって分類することとなった。

指文字は、多くの場合、手話を学ぶ人たちが最初におぼえるものなので、見慣れない手形を設置するよりは、なるべく指文字に近い形を基準にする方が実用的だと考えた。ストーキー(1978)や米山(1984)のように「弁別特徴」のような細かいところまで考えるとすれば、もちろんこの方法はおおまか過ぎて適当ではない。しかし、手話をもとに日本語を探すとすれば、「わかりやすさ」が第1に要求される。

そういう意味で、指文字をもとに35の手形に絞ることができ、その中でアルファベットの指文字から借用したのが3個、指文字にない形を3個にとどめることができたということは、かなり実用にたえるものではないかと考える。

今回は、「手話入門」693語を対象に作業を行った結果、指文字をもとに検索することがかなり可能で、かつ実用的だという感触を得た。

しかし、693語はまだ基本語彙の中でも一部に過ぎない。辞書として利用するには、最低2000語程度の基本語彙を収録する必要があるので、対象となる範囲をもっと広げることになる。そうすると、「分類した結果10個以内になったところで分類をストップする」という原則に従えば、第4段階ではすまなくなってくるかも知れない。第1段階での手形35個をふやす、または第2、3段階での分類事項をふやす必要がでてくるかも知れない。手形を増やす場合でも、なるべく指文字からはずれないようにしたい。

いずれにしても、あくまでも「わかりやすさ」ということを基本にして、検討を続けていきたいと思う。

<参考文献>

Stoke, W.C. (1978) Sign Language Structure

Linstok Press, Inc

米川明彦 (1984) 『手話言語の記述的研究』

明治書院

(1989年9月25日稿)